

for Better Sound Creation

よりよき音色を求めて

日本における近代管楽器の歴史において、この方をおいて語ることはできない、というひとりが吉田憲司氏。国立音楽大学を卒業後、東京ユニオンを経て日本におけるラテンブームの草分けとなった「オルケスタ・デル・ソル」（太陽の楽団）で活躍し、のちに自らのバンド「ハバタンバ」を率いて世界をまたに大活躍。伝説的ブラストレーナー、カーマイン・カルーソー氏の薫陶を受けた、数少ない邦人音楽家のひとりである。そして、いち早くBSCの魅力を見抜いたひとりでもある

学生と言えども楽器には関心をもつべし

現在は、神奈川にあるヤマハ音楽院で教鞭を執っている吉田氏。彼がBSCと出会ったのは今から3年程前に遡る。

「なんの先入観もなしに吹いてみたんですが、すごく良かったのでとても驚いたのを覚えています。ちょうど自分の楽器を注文しちゃったばかりだったからとっても悔しかったんですねえ（苦笑）」

それからというもの、知り合いや学生が楽器を買い替えたり、新規購入を検討している、と聞けばBSCを紹介しているようだ。

「BSCのラインアップは、初めてマイ楽器を手にする層から、プロフェッショナルとして活躍する層まで、幅広く対応できる品質の良さがあります。だから、安心してすすめられる」

今回は愛弟子のひとりである小野優佳さんに、BSCを体験していただくことになった。「プロとして活躍する際には、単に演奏したり教えたりするだけではなく、今度は自分より未熟な人のために楽器を選ばなければならない、という局面もでてくる。ちょうどBSCは見た感じがほとんど一緒なので、先入観なく楽器の特色を感じ取ることができるはず。生



日射しが降りそそぐヤマハ音楽院にて、仲良くBSCを吹きくらべる師匠と弟子

徒に楽器の「違い」を体験させるにはいい機会だ、と思ったのです」

さっそく吹きはじめる小野さん。かたわらで、吉田氏は抜き差し管をひっこ抜いてピストンのアライメントを確認するなど、すでに臨戦態勢。

「プロになろうという学生は、やはり楽器のことにも関心を持ったほうがいい。たとえばこのBSCの場合、ピストンの抜き差し管を抜いてみると、ピストン部分とケーシングにすれがまったくないのが一目瞭然。どの楽器でも、第一もしくは第三抜き差し管を抜いて覗き込めばわかることですが、プロとして活動したいなら最低これだけはチェックして欲しい、というのは「音質（サウンド）」「マウスピースレシーバーの作り」「マウスピースとのマッチング」「バルブやスライドの動きと息漏れ」

「最低音Gと中音Gの鳴りと響き」「楽器の反応」「中音B♭からCへ移る際と、DからCへのピッチ」というところです。これらが良い楽器は、購入後に即座に仕事で使える楽器です。また、楽器って、不思議なことにデザインから受ける印象と実際の吹奏感は、それほど変わらないものが多いですね。BSCは見た瞬間に「あ、これはいけるな」と感じさせるものがありました」

今回初めてBSC体験をした小野さんは、吉田氏に師事して三年目。小学校の時には大太鼓を担当していたが、前で吹くトランペットがあまりにかっこいいので心を奪われ、中学からトランペットにコンバートして現在に至っている。

「BSCはまったく同じに見えるのに、どれも吹奏感が違うのに驚きました。いい悪い、で



「思わず「検品」の仕事している気になっちゃった(笑)」(吉田)

はなくて、吹いた感じが違うんです…」

BSCのトランペットは、最上級モデルの501G(吉田憲司氏が「もっと早く知っていたら」と悔やんだ程の大絶賛モデルで、あのウィントン・マルサリスも愛用している)以外は、ほとんどがほぼ同じルックス。

「こういう経験は初めてで、驚きました」

学生の場合、自分の上達だけが関心の対象になりやすいが、楽器に関しても注意深くなるべきだ、という吉田氏。

どれもいいが、強いていえば「オールラウンド」(¥302,400・税込)がお気に入り。「ミレニアム」(¥207,900・税込)のコストパフォーマンスの高さにも感心した様子。

「BSCの場合、ドイツで修行した日本人がハンドメイドしている、ということですが、音色が確かにドイツ的。これは単にクラシック向きとかいうことじゃないよ(笑)。「ミレニアム」から「501G」まで、ロータリーの楽器のようにやわらかな響きと、現代的な鮮烈な表現力が共存しているのがBSCの持つ基本的な魅力といえますね」

C管プロトタイプ(取材時)にも興味津々のおふたり。

「ボクはフュージョンでC管使うこともよくあります。このC管、いいなあ…」

鬼才、菊地ひみこさんの「Sevilla Breeze」におさめられている「Gypsy Song From Carmen」がそれだ。

「最初に言ったように、数年前に注文した楽器が、先日海外からようやく到着したばかりなんです。もっと早くこれを知っていたら…」

と、悔しがる吉田氏。

「昔は、このレベルの楽器にめぐりあうのが大変でした。しかし今は最初からBSCが選べる。本当にありがたい時代ですね」

We are Brass Sound Cats!

「上手くなった気が…」いや、マジ上手いよ。



右が吉田大和君、左が小倉志央里さん。都立上野高等学校吹奏楽部で活躍する楽器族だ

今回訪問したBSCユーザーは、なんと高校生。しかも、先輩と後輩ともに相前後してBSCを手に入れた、という。東京芸術大学のほど近く、芸術の森「上野」にある、その名も「都立上野高等学校」。今回のCATSである吉田大和(やまと)君と小倉志央里さんは、同校吹奏楽部のトランペットセクションで頑張るフレッシュな楽器族だ。

「トランペットは高校からなんです。小学校や中学校の最初の頃は、合唱をやっていたんです。そのあと、ソフトテニスもやっていたんですが、あまり面白くなくて、高校に入ったら友達か吹奏楽部に入る、というのでついていって、試しに吹いてみたらとっておえず鳴ったんです」

トランペットは、まず「鳴らす」ことが難しい楽器として知られている。それを、ぱっと持ってすぐ鳴らせた、というのは適性検査で言えば「極上」。つまり相性がいい、のである(取材班はその「相性の良さ」を十数分後に知ることになる…)

一方の小倉さんもまた、高校からトランペットを始めた。やはり友達か吹奏楽部に入る、というのでついていった、という、よくある展開。ご自身はサク스가やりたかったらしいが、残念ながら抽選でトランペットに回されてしまった。そんなわけでなんとなく始めたトランペットだったが、今では大好きな楽器になったそうだ。暗い曲が好き、という、ちょっと大人びた小倉さんである。

昨今の学校吹奏楽は女性天国、というのが相場となっているが、こちらも例外ではない。同校吹奏楽部のなかで男性がふたり揃っているパートは、トランペットと打楽器だけだそう。数少ない男性陣のひとり吉田君は、多くのおじさん楽器族同様に、お茶の水や新大久保の楽器街をめぐるのが趣味だ、という。

「週一回は、両方の楽器街(新大久保とお茶の水)を回りますね(笑)」

吉田君が、BSCと初めて出合ったのは、その一方の楽器街「お茶の水」黒澤楽器でのこと。

「いろいろ吹いてきましたが、このBSCがほくの音に一番あっているみたいなんです。デザインもかっこいいし…すごく太い音がする。バンドで吹いても音をうまく届け込ませることも、際だたせることも自由自在。自分が上手くなった気がします(笑)。この楽器、ドイツで活躍する日本人の方がつくっていらっしゃる、ということは本で読んで知っていました。そのせいか、吹いた感じもロータリートランペットに似ていますね」

楽器街通らしくマニアックな答え。ロータリーは楽器屋めぐりで体験したらいい。一方の小倉さんは、一足先にBSCを手に入れた吉田先輩の「ミレニアム」を吹いて一発で気に入る購入を決意。吹きやすいので好きです…と、初々しく頬を染める小倉さんだが、取材班が持参した高級モデル501Gを吹いてみたら、真顔になって「これ、好きです」ときっぱり告白。価格にして「ミレニアム」の約3倍だが、高校を卒業してからアルバイトを一所懸命頑張れば充分手が届きますヨ!

吉田君は、C管のプロトタイプを試して「音程がいい!」「これまでに吹いたどのC管より吹きやすい!」と、感嘆符を連発。学校バンドの他に地元の一般アマチュアバンド(文京区交響吹奏楽団)でも活躍しており、そこでC管などを借りた経験があるそうだ。ジャズにも興味がある、と微笑む吉田君。

取材班が持参した「ニューヨーク」「オールラウンド」を、ふたりとも片っ端から吹いていく。どちらも負けず劣らず、しっかりしたふくよかな音色。ううむ、これならバンド全体のサウンドを明確にリードできるに違いない。昨年コンクールに初出場し、今年は二回目の挑戦になる。高い成績が期待できそうだ。

「ほんと、BSCだと自分が上手くなったみたいに思えます(笑)。今日、はじめて501Gや「ニューヨーク」などを吹きましたが、いいですね!」

やはり値段だけのことはある、と納得顔。しかし、おふたりとも素晴らしい音色を持っているのには、こちらが驚かされた。ごく自然なアンブシュアで、自然な無駄のない鳴り方をしている。吉田君にいたっては、501Gを手に、なんとダブルハイE(高いミの音)まで軽々と鳴らしてしまっ!

「これ、凄いなあ!」

いや、凄いなのは君たちの方だよ。